

リンドバーグ夫人著「海からの贈物」新潮文庫 新潮社 1967年7月20日刊を読む

1. 幾つかの貝

(1) 島での生活はいろいろな意味で、私^がが家でやるよりも旨く私のために選択してくれる。私がコネティカットに帰ったならば、私はまた、遠心的な活動のみならず、求心的な活動も多過ぎて、また、気を紛らせることだけでなしに、やり甲斐がある仕事が、そしてまた、つまらない人ばかりでなくて面白い人も多過ぎて、その下に埋まってしまうのだろうか。世界の多様な姿が、また私の価値の観念を歪めるに違いない。質ではなくて量が、静寂ではなくて速度が、沈黙ではなくて騒音が、考えではなくて言葉が、そして美しさではなくて所有欲が、価値の基準になるのである。私はこれにどうすれば抵抗することができるだろうか。どうすれば、人間を幾つにも分割する圧力に対して自分を守れるだろうか。

(2) 私は島での自然な選択の代りに、ここにいる間にはっきりしてきた、今までとは違った価値の基準によるもっと意識的な選択の方法を採用しなければならない。それを私は島の教訓と呼んでもいいので、今までとは別な生活の仕方へのそれは指針なのである。それは、人生に対する感覚を鈍らせないために、なるべく質素に生活すること、体と、知性と、精神の生活の間に平衡を保つこと、無理をせずに仕事をする事、意味と美しさに必要な空間を設けること、一人でいるために、また、二人だけでいるために時間を取っておくこと、精神的なものや、仕事や、人間的な関係からでき上がっている人間の生活の断続性を理解し、信用するために自然に努めて接近することなどであって、いわば、そういう幾つかの貝殻である。

(3) 島での生活は、それを通してコネティカットでの私の生活を調べるレンズの役をしてくれた。私はこのレンズをなくしてはいけない。休みの間に与えられた視覚は段々に弱っていくもので、私は島の眼でものを見ることを忘れてはならない。貝殻が私にそれを思い出させてくれて、私の島の眼になってくれるだろうと思う。

P106 ~ 107

2. 浜辺を振り返って

(1) 私は麻で編んだ籠を持ち、柔らかな砂が足の下で崩れて、一人で考えていられる時はもう直ぐ終る。

(2) 質素な生活と、内的な自足と、人間的な関係の充実を求めるといふのは、これはかなり狭いもの^のの見方ではないだろうか。或る意味では、それは勿論そうである。一種の世界的な立場と云ってもいいものが人類の前に突然に現われて、世界は今日、我々の周囲に益々広くなっていく輪を描いて鳴動し、火を吹き始めている。そして我々から一番遠い輪に当る所で生じた大緊張や、対

立や、災難も我々に影響せずにはおかなくて、我々はそれに無関心でいることはできない。

(3)しかし我々がこの世界的な感覚に即して行動するには、どうすればいいのだろうか。我々は今日、世界中のものに同情し、活字になって伝えられる報道を^{すべ}凡て消化し、我々の心や頭に生じる道徳的な衝動を残らず行為に移すことを要求されている。世界の凡ての部分が互いに各種の関係で結ばれることになったために、我々は我々の心には入りきれないほど多くの人間のことを絶えず思っていなければならない。と言うよりも、——なぜなら、私は人間の心というものの大きさは無限である^{ある}と考えるから、——現代の伝達の方法がいろいろな問題を我々に課して、それは人間の体力が堪え得る量を越えている。そして我々の心や、頭や、想像力が広い範囲にわたって働かされるのはいいことだと私は思うが、我々の体や、神経や、耐久力や、寿命はそれほどに伸縮自在のものではない。私の一生は、私の心を動かす凡ての人々の要求に行為によって答えるには短か過ぎる。私はその人たちの凡てと結婚することも、その人たちを凡て私の子供として生むことも、^{ある}或いは私の両親が病気になったり、年取ったりした場合と同様にそういう人たちの凡ての世話をすることもできない。私たちの祖母たちは、また、少し無理をすれば、母たちでさえも、その心や頭に生じる大概の衝動が行為に移せる狭い範囲内で生活していた。そして私たちもその同じ伝統の下に育ったのであって、それが今日ではもう通用しなくなったのは、私たちの生活の範囲が時間と空間の全体に^{ひろ}拡げられるに至ったからである。

3. こういう困難に直面して、私たちはどうすればいいのだろうか。私たちはどうすれば私たちの世界的な感覚と、厳しい良心を調和させることができるだろうか。私たちはそのことで、何かの形で妥協することになる。私たちは多数の人間の一人々々に就いて考える訳にはいかないから、ときにはこれを多数という名の下に、一つの抽象として扱おうとする。また現在の複雑な状態に手を焼いて、これを飛び越え、未来のもっと簡単な夢に生きる。そして私たちの周囲にある私たち自身の問題を解決することができないので、私たちがいる場所から離れた所で起っている世界の問題に就いて論じ合う。私たちが背負わされた堪え難い重荷から、私たちはそうして絶えず逃れようとしている。しかし私たちは本当に多数という一つの抽象に心を動かすことができるだろうか。また、未来は現在の代用になるだろうか。そして私たちが現在を無視して、それで未来がよくなると言えるだろうか。また、私たち自身の問題が解決できなくて、世界の問題が解決できるだろうか。私たちはそうすることに、どこまで成功しただろうか。輪の中心ではなしに、その外側に注意を向けることで、どれだけの効果を挙げることができただろうか。

4. 考えてみると、現代生活で実際に損害を^{こうむ}蒙っているのは前に挙げた三つの中心、自分が現にいる場所と、現在と、それから個人というものとその他の人間との関係ではないだろうか。未来への競争で現在は^{わき}脇へ押しやられ、自分から離れた場所のことが取上げられて、自分が現にいる場所は無視され、個人は多数によって圧倒されている。アメリカは今日の世界にまだ残っている現在の中で最も輝かしいものを与えられていながら、未来に対して^{どんよく}貪欲な余りに、その現在を楽しんでいる暇がない。歴史家、或いは社会学者、或いは哲学者は、私たちがまだ開拓時代のアメリカ人の活動に駆られていて、その精神や、次の「こと」をしなければならないという清教徒的な観念から抜け

きれずにいるのだと言うかも知れない。しかし一方、過去の思い出に耽^{ふけ}っているように私たちがいつも思うヨーロッパは、不思議なことに、今度の戦争以来、現在というものを見直さずにはいられなくなっている。よかった過去の日々は余りにも遠くて、最近の過去は余りに悲惨なものであり、未来はどんなことになるのか全く解^{わか}らないので、現在が「ここ」と「今」の黄金の現在に変わる機会を与えられたのである。今日、ヨーロッパ人はただ日曜日に田舎に散歩に出掛けるとか、町の喫茶店で一杯のコーヒーを飲むとかいう簡単なことでも、それで現在を楽しんでいる。

5 . 或いは人間は、ここと、今が脅^{おびや}かされるようになるまでは、それに目を留めないものなので、ここと、今は今日のアメリカでも、漸^{ようや}く脅かされ始めている。我々は個人というものが我々の時代になって多数に、——その多数が産業であっても、戦争であっても、或いは思想や行為の統制であっても、——その多数に個人であることを返上する誘惑や脅迫にさらされることになったために、却^{かえ}って個人の尊厳に目覚め出したのではないだろうか。我々は今こそ、ここと、今と、個人というものを本当に理解することができるのである。

ここと、今と、個人というものは当に聖者と、芸術家と、詩人と、それからこれは大昔から、女が特に関心を寄せていたものなのである。女は家庭という一つの狭い範囲で、その家庭をなしている一人々々に認められる独自のものを、また、今という時間の自然の姿を、また、ここという場所の掛け替えのなさを決して忘れたことがない。そしてこれが生活の基本であり、そしてまたもっと大きな、多数とか、未来とか、世界とかいうものを作っている要素なのである。我々はそれを無視することはできても、それなしではすまされない。こういう要素は、川になって流れる水の滴^{しずく}であり、生命そのものの本質であって、それが現在では無視され勝ちであることに抗議するのが、女である私たちに与えられた任務であるかも知れないのである。そしてそれは、もっと大きな責任から逃れるためではなくて、そういう責任の性質をよりよく認識し、その解決に乗り出す第一歩としてなのである。私たちが私たちの中心にあるものから出発すれば、そこから輪の外側まで拡がっている、何か価値があるものを発見する。私たちは今ある喜びと、ここにある平和と、自他にある愛を再び取返して、地上にある神の王国はそういうもので作られているのである。

6 . 波音が私の後から聞えてくる。忍耐、——信念、——寛容、と海は私に教える。質素、——孤独、——断続性、・・・・・・。しかし私が行って見なければならぬ浜辺は他にまだ幾つもあり、貝殻^{かいがら}もまだ幾種類もある。これは私にとって、そのほうへ一歩を踏み出したのに過ぎないのである。

P111 ~ 115

[コメント]

本著は大西洋横断飛行に最初に成功した有名なリンドバーグ大佐の夫人の著作。第二次世界大戦後、ヨーロッパに渡りフランス・ドイツなどの罹災民の救済事業に挺身し、戦災を受けた各国の状況に関する貴重な報告書を出している夫人ならではの著書。日々の生活を大切にしながらも、世界に対するコミットメントをどう実現し続けるか。現代人の生き方にも貴重な示唆を与える書。

- 2009年9月20日 林明夫記 -